

日本宗教学会 第79回学術大会

パネル発表要旨集

学術大会 会期：2020年9月18日(土)～20日(日) オンライン開催

主催：駒澤大学学術大会実行委員会

開催パネル一覧

9月19日(土)	パネル題目	代表者
13:00-14:40 第1グループ	AIと宗教-AIと世界観・神観念-	木村 武史
13:00-15:00 第2グループ	陰陽道研究の最前線	林 淳
15:00-17:00 第1グループ	医療現場における宗教者による非信者への宗教的ケア	山本佳世子
15:20-17:00 第2グループ	AIと宗教-AI・ロボットの日本文化における受容を考える-	師 茂樹
9月20日(日)	パネル題目	代表者
13:40-15:20 第1グループ	「次世代教化システム」の継承と創造-神社・寺院・地域社会-	川又 俊則
13:40-15:40 第2グループ	宗教と教育における多様性-新たな共生への視点を考える-	森田 美芽
15:40-17:40 第1グループ	講と女性をめぐる研究-ジェンダー視点が拓く可能性-	小林奈央子
16:00-17:40 第2グループ	現代日本の葬送文化再考-異文化の視点から考える-	宮澤 安紀

パネル趣旨本文は、提出された原稿をそのまま掲載するのを原則としています。

AIと宗教—AIと世界観・神観念—

AIと一神教は関係あるのか	代表者：木村 武史
現代イスラーム社会におけるAIの位置づけ	小原 克博(同志社大)
トランスヒューマニズムと永遠性	石田 友梨(岡山大)
技術社会における人工的他者としてのAIと情動	沖永 宜司(帝京大)
	木村 武史(筑波大)
	司会：木村 武史(筑波大)

「パネルの要約と意義」

AIの技術開発とその背後にある神観念・世界観についての議論が盛んにおこなわれるようになってきている。近代科学が西洋キリスト教世界を背景にして成立してきたように、AIの構想、技術化、実装化には西垣通が批判しているように一神教的世界観やトランスヒューマニズムが関係しているのであろうか。あるいはハラリが懸念しているように人間はAIの開発、実装化を通じてホモ・デウス の位置につこうとしているのであろうか。他方、AIの技術進歩によって知的側面から感情的・情動的側面へとその応用範囲は広がりつつあり、それに応じて人間社会の情動的応答にも関心が向けられ始めている。当パネルはAIを巡る世界観・神観念を宗教学的に検討する。

「AIと一神教は関係あるのか」小原克博

高度に進化したAIは人間の知能を凌駕し、神の如き存在となるのではないかという危惧は洋の東西にかかわらず存在するが、日本ではAIの推進が「一神教的神話の21世紀バージョン」「人間が神と一体化するという思想」(西垣通『AI原論——神の支配と人間の自由』)といった具合に、一神教との関係で批判的に論じられることがある。こうした言説をオキシデンタリズム的宗教観として批判するだけでは十分ではない。本発表では、キリスト教における「神の像」(創世記1:26-27)を手がかりに、人間とAIの再帰的關係に光を当て、宗教学的思索のAI研究への貢献可能性を探る。

「現代イスラーム社会におけるAIの位置づけ」石田友梨

西垣通は、欧米におけるシンギュラリティ仮説には、ユダヤ=キリスト一神教の思想が反映されていると指摘している。同じ一神教でありながら西垣が除外したイスラームにおいては、AIはどのように位置づけられているのだろうか。サウジアラビアでは、AI「ソフィア」に市民権が与えられ、UAEではAI国務大臣が誕生するなど、最新

技術であるAIを経済政策として受け入れることに積極的にみえる。その一方で、AIを人間とみなせるかといった問いには、聖典クルアーンに基づいた回答がなされるなど、イスラームの世界観・神観念からAIを位置づける言説も生まれつつある。本発表ではこれらの言説から、現代イスラーム諸国におけるAIの位置づけを考察する。

「トランスヒューマニズムと永遠性」沖永宜司

トランスヒューマニズムとは、未来の科学技術によって「死を打ち破る」、主に20世紀以後の欧米を中心にした一連の思想的、社会的運動を指す。身体の冷凍保存による将来の復活や、意識のコンピュータへのアップロードによる永遠の生の獲得など、それは一面でキリスト教に内在する死生観を暗に反映している。

しかしそこには神への帰依に則った永遠性ではなく、科学技術信仰にもとづく自己拡大の永遠性の希求という一種転倒した特徴がある。他方で、将来の科学の発展が未知であるがゆえの論駁不能な側面も持ち、それが現代の科学信仰による独特の信念形態を形成している。本発表ではその形態を宗教学的観点から批判的に検討する。

「技術社会における人工的他者としてのAIと情動」木村武史

従来、AIの研究では知的な側面に目が向けられてきていた。しかし、昨今の技術的深化によりAIに人間の感情を読み取る機能とともに、AI自身に感情的機能を付与しようとする研究もある。人間に対応するAIには思いやりを持たせなくてはならないというC・メイソンの研究もある。さらには、AIの受け手側の人間社会の情動面、感情面も着目されるようになってきている。理性的産物であり、人工的他者としての姿を示し始めているAIの社会実装化によって創出してくる世界観では人間の情動面の意義を検討する必要がある。

陰陽道研究の最前線

陰陽道の定義とその成立	代表者：林 淳
陰陽道・陰陽師研究の中世	細井 浩志 (活水女子大)
近世陰陽道研究の現在	赤澤 春彦 (撰南大)
民俗と説話の領域から－民俗的陰陽道研究の視点－	梅田 千尋 (京都女子大)
	小池 淳一 (国立歴史民俗)
	コメンテータ・司会：林 淳 (愛知学院大)

陰陽道研究は、約30年前に刊行された『陰陽道叢書』によって形成された分野であった。『陰陽道叢書』がなければ、いまも陰陽道は学術の世界で市民権を得ることはなかったと思われる。現在の陰陽道研究は、どこから来て、どこへ行こうとしているのか。この約30年の間に研究上で起こった変化について、3点にわけて述べる。第1に、かつては陰陽道といえば、端的に平安時代の陰陽道を意味した時代が長くあったが、その時代は終わった。中世、近世の陰陽道研究が著しく進展し、平安時代の陰陽道は、陰陽道史の一時代と相対化された。中世、近世は言うまでもなく、近代までを陰陽道研究は扱うようになった。第2に、陰陽道の起源が古代中国ではなく、9～10世紀の日本にあることが、山下克明によって指摘されたが、それが共通認識となった。日本史のなかで陰陽道を考察し、日本の政治史、社会史の研究とリンクさせた議論が可能になった。国家権力の統治にとって陰陽道、陰陽師が果たした機能や権限への関心が持続的に展開した。第3に、暦や占いに関するテキスト研究が深化した。暦であれば科学史との接点、占いであれば、書物史、民俗学との接点が広がった。この2つの領域は、陰陽道研究の応用編として理解できる。以上3点を挙げてみたが、他にも論点は様々にある。本パネルの4人のパネリストは、これまでの研究史を担ってきた研究者である。陰陽道研究が、どのような課題に直面し、どこへ行こうとしているのかを、各人が専門の立場から論じる。

細井浩志「陰陽道の定義とその成立」は、陰陽道の定義と成立の問題を取り上げる。かつて陰陽道は平安時代がその典型とされ、また陰陽五行説に依拠する呪術宗教一般という意味で使われる場合もあった。1990年代以後、この認識は大きく修正されたが、一方、陰陽道とは何か、陰陽五行説に基づく他の呪術宗教とはどう違うのかについては、必ずしも明確ではなく、定義の曖昧さへの批判も

出されている。本報告では主に古代史の立場で陰陽道の定義と分類を考察し、これに基づいて成立を論ずるとともに、中近世陰陽道研究との接合を試みたい。

赤澤春彦「陰陽道・陰陽師研究の中世」は、ここ20年ほどで大きく進んだ中世陰陽道研究を取りあげる。国家や権門における陰陽道の役割や位置づけは従来の見解が大きく見直された。また、平安時代後期以降の官人陰陽師の「イエ」の展開や、暦や天文、呪術など諸技能に関する新たな知見など、様々な分野で深化している。本報告ではこれらの成果をまとめた上で、陰陽道史における中世という時代の特徴や固有性について考えてみたい。

梅田千尋「近世陰陽道研究の現在」は、身分的周縁論や朝幕関係論および宗教社会史といった、歴史学の主流的研究テーマと近接した近世の陰陽道研究に注目する。また、近年は近世社会に存在した様々な民間宗教者の実像が明らかになっており、その中での陰陽師の位置づけを論じることも可能となっている。こうした状況のなかで、一方、陰陽道研究の可能性や論点整理をふまえた課題の共有は進んでいない。近世社会における陰陽道・陰陽師が担った役割とは何か、陰陽道史における近世という段階をどのように評価するか。近世陰陽道史研究の現在地と展望について考える。

小池淳一「民俗と説話の領域から－民俗的陰陽道研究の視点－」は、民俗文化研究において陰陽道を対象化することの難しさを論じる。その難しさは、その具体的な担い手が明治以降は消滅した点にある。旧暦の廃止によって潜在化した陰陽道の知識を把握するためには、断片的な俗信とその系譜を、民俗信仰や説話・芸能などの広範な領域のなかを探る必要がある。本報告では、従来の研究蓄積に検討を加え、暦注の展開や説話の伝承における陰陽道を対象化する視点について考えてみたい。

代表者の林淳が、司会、コメンテータを行う。

医療現場における宗教者による非信者への宗教的ケア

医療施設における宗教家の活動調査報告	代表者：山本佳世子
病院における亡くなられた非信者患者への宗教者によるケア	谷山 洋三 (東北大)
ビハーラ僧による非信者への宗教的ケア	山本佳世子 (天理医療大)
超宗派の専任ビハーラ僧による非信者への宗教的ケア	打本 弘祐 (龍大)
	森田 敬史 (龍大)
	コメンテータ：柴田 実 (聖学院大)
	司会：山本佳世子 (天理医療大)

宗教者は、特定の信仰を持たない／信仰を異にする患者のケアにどのように関わることができるのだろうか。あるいは、そもそも関わる必要があるのだろうか。

近年、臨床宗教師や臨床仏教師と言った医療現場で活動する宗教者が注目され、緩和ケア施設を中心に徐々に広がりを見せている。そこでは信者獲得を目的とした布教伝道を行わず、宗教的ケアの提供には慎重な姿勢が取られていることが多い。とはいえ、宗教者としてのアイデンティティ、宗教者が病院にいる意味を考えたときに、「信者獲得をしない」「宗教色を出さない」と言った要望の中でどのような活動が可能なのか、葛藤も生じる。病院等の医療福祉施設での宗教者の活動を考えたとき、(特定の宗教的背景を持たない人も多い)スピリチュアルケア師と何が異なるのか、宗教者には何が求められているのか、改めて考える必要があるだろう。

そこで、本パネルでは、臨床宗教師が注目される以前から、宗教系病院で活動する宗教者に焦点を当てる。臨床宗教師の活動の多くが無償のボランティアであるのに対し、有償で活動している例が多く、フルタイムも多いなど、活動頻度も高い。緩和ケア施設のみならず、一般病棟も含めたケアを行っている例も多い。とはいえ、それらの施設でも患者の多くは非信者であり、非信者に対する多様な宗教的ケアが、実際には行われ、受け入れられているのではないだろうか。非信者に対する宗教的ケアの諸相を示し、非信者への宗教的ケアの可能性と意義、求められる在り方を検討すると同時に、「無宗教」と言われることの多い日本人の死生観や宗教性に関する議論にも一石を投じるものになればと願っている。

本研究グループは、これまで宗教家が活動していると想定される国内470の医療施設を対象とした質問紙調査および宗教系病院で活動する宗教者にインタビュー調査を行ってきた。第一発表者の谷山洋三は質問紙調査の結

果に基づき、施設の宗教的背景の有無による対応の違いなど、非信者への対応を含む宗教家の活動内容とその評価について報告する。司会で第二発表者の山本佳世子は、宗教者にしかできない、あるいは宗教者だからこそできるケアであり、病院において宗教者がそこにいることの意味が最も顕著になる場の一つとして、病院で亡くなられた非信者患者への宗教者によるケアについて論じる。具体的には、天理よろづ相談所病院と2つのキリスト教系病院における亡くなられた患者のお見送りや葬儀、その後の遺族のケアに関する活動から、非信者の患者が宗教者と関わる意義について検討する。続いて、第三発表者の打本弘祐は、浄土真宗本願寺派が設立母体である「あそかビハーラ病院」で活動するビハーラ僧の非信者ケアを取り上げる。地域に同宗派の寺院・信徒が少ない中で活動するビハーラ僧は、非信者へのケアに直面する。特に入院中の他宗派・他宗教の信者が持つ宗教的ペインへのビハーラ僧による多様な対応事例を通して、非信者への宗教的ケアの実際を論じる。最後に、森田敬史は、超宗派の仏教者が出入りする長岡西病院を取り上げる。長岡西病院ビハーラ病棟では、森田本人が2017年度まで常勤ビハーラ僧として従事していたが、2018年度より森田の退職に伴い、地元の仏教者の有志から選出された4名の専任ビハーラ僧が交代で勤務するようになっている。常勤から非常勤に変わったこと、しかし地元の複数の宗派のビハーラ僧が関わることのメリットやデメリットを検討することを通じて、非信者への宗教的ケアの限界や可能性を示す。

以上の4名の発表を受けて、コメンテータの柴田実は、聖路加国際病院のチャプレンとしての経験から、コメントを行う。また、病院における宗教者の在り方について、参加者を交えた活発な議論を期待する。

AIと宗教—AI・ロボットの日本文化における受容を考える—

日本文化は「テクノ・アニミズム」か	代表者：師 茂樹
擬人化された世界におけるAIの生命観—伝統芸能の事例から—	師 茂樹 (花園大)
人知を超えるもの、人、つくられたものを巡る信念の揺れと共存	永原 順子 (阪大)
高台寺のアンドロイド観音「マインダー」開発の背景	濱田 陽 (帝京大)
	後藤 典生 (高台寺)
	司会：師 茂樹 (花園大)

AIやロボットが普及する過程で起こる問題の一つが、各地の伝統・文化でAI等がどのように受けとめられるか、ということである。IEEEが公開している指針「倫理的に調和したデザイン」においては、アジアやアフリカの諸伝統(仏教・神道・ウブントゥなど)が参照されているが、人文系の研究者がほとんど入っていないそれらの研究は、残念ながら十分なものとは言えない。本パネルでは、特に日本の文化、宗教、伝統などの文脈におけるAI・ロボット理解、受容もしくは拒絶を検討、分析し、AI等の開発にフィードバックし得る知見を得ることを目的とする。日本文化論や仏教学の研究者(濱田・永原・師)に加え、京都を代表する寺院・高台寺においてアンドロイド観音「マインダー」をプロデュースした後藤典生師(非会員)を迎え、多角的に議論を行う。

【各発表の概要】

- ①「日本文化は「テクノ・アニミズム」か」 師茂樹
梅原猛をはじめ、縄文時代から続く「日本文化」の特徴を、神道に代表されるアニミズムとする言説についてはよく知られている。アン・アリスン『菊とポケモン』は日本のポップカルチャーを「テクノ・アニミズム」と見たが、それはJensen & Blokの論文“Techno-animism in Japan”等を経由してIEEEの「倫理的に調和したデザイン」で引用され、ロボットやAIなどが世界のどこよりも日本に浸透している理由として理解されている。本報告では、これらを批判的に検討したい。
- ②「擬人化された世界におけるAIの生命観—伝統芸能の事例から—」 永原順子
人は、世界における様々な対象に自己投影することで疑似的意思疎通を行い、それを基底に現実を捉えている。そういった擬人化された世界を反映したものの一つが芸能である。疑似的意思疎通から架空の次元が創造され、そ

こでは人や霊やモノが語る。芸能を演じる主体が人であれ、人形であれ、観客はそれらに再度自己投影していくが、その過程で、ある人形が神格化されたり、面に呪力を求めたり、といった思想が形成される。芸能における主体を靈魂や意志を持った能動的なものとして捉える延長線上に、AIの生命観を想定することは可能なのか、あるいはAIの存在は擬人化の構造を再構築するのか、について論じた。

③「人知を超えるもの、人、つくられたものを巡る信念の揺れと共存」 濱田陽

AIに代表される急速に発展を続ける新テクノロジーの、多種多様な分野における実用化と社会的関心の急激な高まりにより、神仏、人間、人工物の関係性が複雑化し、改めて問い直されるべき事態が生じている。そして、新テクノロジーの受容の問題は、その生み出すものへの信念が、神仏、人間に対する信念とどのような布置を形成し、そこから信念のいかなる揺れや共存の相が生じるのか、という問いに深いレベルで係わるように思われる。日本のAI受容状況に着目し、信念の揺れと共存について考察したい。

④「高台寺のアンドロイド観音「マインダー」開発の背景」 後藤典生

2019年2月に発表されたアンドロイド観音「マインダー」は、「新しい」「進化した」仏像として大きな話題となる一方、批判的な声も少なくない。このプロジェクトの背景には、コンピュータを使って仏・菩薩や祖師から直接説法を聞くことができないか、という先行する試みがある。また、人間の寿命を超えて永久に進化する教化者として、AIの技術を用いたいという宗教的な動機もある。これらの点をふまえて、「マインダー」開発の経緯や背景について報告する。

「次世代教化システム」の継承と創造－神社・寺院・地域社会－

神社神道における次世代教化システムの可能性と課題	代表者：川又 俊則
仏教青年会の若手僧侶育成による次世代教化	冬月 律 (モラロジー研究所)
寺社を中心とした文化資源の継承と創造	川又 俊則 (鈴鹿大)
	郭 育仁 (鈴鹿大)
	コメンテータ：井口 貢 (同志社大)
	司会：川又 俊則 (鈴鹿大)

本パネルは、科研「伝統宗教の『次世代教化システム』の継承と創造による地域社会の活性化」(2017～2020年)のこれまでの3年間の研究成果をもとに計画された。

子ども会や青年会を50年続けてきた寺院や団体、婦人会・壮年会を運営する宗教集団には、地域ネットワークの拠点機能と次世代継承の可能性が見出せる。伝統的宗教集団で成功した「次世代教化システム」は多方面で応用できる。報告者たちは、それぞれ先駆的事例について調査・考察した。そして、宗教集団の「次世代教化システム」を改めて考えたい。

まず、神社神道の実態については、全国組織として神道青年全国協議会(神青協)、神道青年会、ほかにも名称は地域によって異なるが氏子青年会が存在する。神青協と神道青年会についてはともに神社を中心に集まった青年の組織であり、氏神様や崇敬神社の発展や地域振興に関する様々な活動が展開されている。また、地域を巻き込んだ神職の活動は「教化活動」の一環として、神社界唯一の業界紙の『神社新報』および神社本庁の機関誌の『月刊若木』、各神社庁の『庁報』などで広く報じられている。本研究の研究分担者の冬月は、それらの教化活動に関する記事や実際のフィールドワークで得た知見から、多種多様な活動の形態、特徴などを通じて活動の現況を概観する。それを踏まえて、従来の教化活動として取り組んできた神社での活動と、本研究における「次世代教化システム」との共通点、差異などについて分析・考察し、神社神道における次世代教化システムの可能性と課題について論じる。

続いて、仏教の実態を考察する。神道同様に、若手僧侶たちは各宗派でかつ、全国規模のものとして全日本仏教青年会が存在している。いずれも、年齢階梯的な組織であり、僧侶の資格を得た若者たちが参加し、それぞれの地域

で宗派ごとに、あるいは超宗派で学びを深め、僧侶としての経験値を積んでいる。三重県曹洞宗青年会でのフィールドワークを実施した研究代表者川又が、そこで得たことを踏まえて、それ以外の宗派との差異、全国各地での取り組みの成果などを論ずる。

研究分担者の郭は、「次世代教化システム」の継承と創造について、寺社とそれを取り巻く地域社会の抱えている課題を取り上げ、その問題解決に求められる共感と協働のあり方を報告する。人々の暮らしのなかで寺社ないし祭礼活動の持つ社会的な役割が希薄する点は顕著な共通課題とされていることから、各地の状況に応じて宗教者や住民の思いによって発揮される創意工夫を紹介するとともに、新たなネットワークの形成に考察を加える。例えば、現代社会の諸問題と信者の悩み解消とを総合的に捉え、成婚人数が1000名以上の活動成果を生み出している龍雲寺(静岡県浜松市)の「吉縁会」、神社参詣のあり方を型破りした石浦神社(石川県金沢市)の「きまちゃん」とその御用達マップ、地元商業者の人としてのステップアップに繋がる化野念仏寺(京都府京都市)の御用達の会、修学旅行生に対する生活全般の学び直しにスタートした天龍寺(京都府京都市)の座禅会、「神主は森の中で待っていたらダメ」という大変示唆に富む取り組みとしての「こども参宮団」(静岡県神社庁)等の事例を紹介する予定である。

以上の3つの報告について、観光文化政策の専門家で文化経済学・文化政策学・まちづくり文化論等の研究をしている井口貢氏をコメンテータに迎え、地域社会のあり方と次世代育成の課題等について、上記宗教界の状況について、各報告について評してもらう。「地域社会の活性化」は本パネル全体を通じた課題の一つであり、その観点を重視してコメントいただく。

宗教と教育における多様性—新たな共生への視点を考える—

宗教の観点から教育の多様性を理解する
 ミッションスクールにおける多様性受容と理解の教育
 教育学からみる宗教的多様性と教育ニーズ
 宗教的多様性の時代に求められる倫理

代表者：森田 美芽

森田 美芽 (大阪キリスト教短大)

水口 洋 (玉川聖学院)

丸山 英樹 (上智大)

下田 正弘 (東大)

コメンテータ：土井 健司 (関西学院大)

司会：森田 美芽 (大阪キリスト教短大)

現在、特に初等中等教育における「特別の教科 道徳」の特徴として、「一つの価値を教え込むのではなく、多様な価値を理解し合う」「多様性を認め、その中でよりよい生き方を求める」「考え、対話する道徳」の面が強調されている。こうした姿勢は、多様性の中で共に生き、対話し、理解し合い、異なる意見と共存するという点で、現在のこの多文化の下での教育にも大きな意味を持つのではないか。日本学術会議 哲学・倫理・宗教教育分科会では、この視点に立ち、これまでに「考える力」を通して主体的な思考の育成、「道徳教育の問題点」で「考え、議論する道徳」の必要を主張してきた。そしていま、その流れで「多様性」をどう受け止め、理解し、共に生きるための道徳へと結びつけるかを考えてきた。

今回のパネルでは、多様性の理解をどのように進めるかについて、最も日本社会での理解の深化が求められる、多様な文化的背景、とりわけ多様な宗教の理解と共生がどのように可能か、実際の教育の現場で起こっている困難な課題を通して、どのような共生の形を求めるか、道徳教育との関連性、また今後の教育の在り方についての示唆を求め、その方々と共存し、共に生き、学ぶ場となっていくために何が必要かを共に考える機会としたい。特に本学会において、その多様性のもととなる宗教的背景の理解、また多様性を共存させる宗教の立場からの発想、多様な宗教性の日本社会へのより深い理解を発信していきたい。

いま、日本の学校には、多くの外国人や他文化の背景を持つ人が現実には増加し、多様性の理解と共生がより喫緊の課題となっている。少子化のため日本人の子どもの数が減少する中、地域によっては外国人や外国籍の子どもが日本人よりも多いという公立学校も存在する。キリスト教主義学校などは、早くからそうした子どもたちの受け入れを行うなどして、その問題に直面している。また独

自の教育方針に基づき、多様性を理解する教育の試みを行っている。

異なる文化的背景を持つ子どもたちにとって、日本の学校教育では様々な困難に会う。日本の教育に適応することだけが求められ、自身の持つ文化的・教育的背景が顧慮されず、いわば「根無し草」にされてしまう。そのために学校への不適応やその結果として不登校が起こることもしばしばある。つまり、日本文化は一神教を背景としないから寛容であるという思い込みで、いわば日本文化・日本教に従わない者を排除するという極めて排他的な論理が無言のうちにあったが、そこから文化的・宗教的差異を理解し共生するために何が必要か。

多様性を受け入れ、共存し、共に理解を進めるためには、そうした現状の中で、教育の現場で多様性をどう受け入れ、どのように共存して行くかが問われている。そうした多様性の背後に、どのような宗教的背景があるのかを考えた上で、より深い多様性の理解と受容を進める必要があるのではないだろうか。そのため森田がこの問題の概要と方向性を示し、水口氏には、実際のキリスト教主義学校における多様性理解の試みと、その中心となるキリスト教主義の関係と実際の生徒への影響について、丸山氏には、国際比較の点から、日本の教育の中の国際理解教育、特に宗教教育や家庭との関係など、学校制度のみならずノンフォーマル教育面からの宗教的多様性の受容や理解についての現状についての考察をいただく。下田氏は、インド及び中国の仏教思想のエキスパートとして、こうした宗教的多様性の受容の現状から、新たな時代に求められる共に生きるための倫理の方向性を示していただく。最後にコメンテータの土井氏に、以上の発表へのコメントと道徳教育における多様性理解への提言をまとめとする。

講と女性をめぐる研究—ジェンダー視点が拓く可能性—

代表者：小林奈央子

契約講社会における女講中の役割と相対性

戸邊 優美 (埼玉県立歴史と民俗の博物館)

「講的なもの」としての女性宗教者の集まり—沖縄の事例から—

後藤 晴子 (南山宗教文化研究所)

梅花講における女性僧侶・寺族・女性檀信徒講員

佐藤 俊晃 (曹洞宗総合研究センター)

御嶽講と女性先達—行と法力が支える講活動—

小林奈央子 (愛知学院大)

コメンテータ：長谷部八朗 (駒大)

司会：小林奈央子 (愛知学院大)

講と女性をめぐる研究は、おもに民俗学において「女人講」研究として1990年代にさかんにおこなわれ、関東地方での事例を中心に多くの研究成果がある。「女人講」と称するものの、その内実は、子安講や観音講、十九夜講など、女性が構成員となっている種々の講をさし、講組織が、村落の中で生きる女性たちの日常的な悩みを共有する場として重要な役割を果たしていることが指摘されてきた。しかしながらそれらの研究では、娘、妻(嫁)、母といった女性のライフコースは自明のものとされ、特定地域における「女人講」の、個別の事例報告にとどまる傾向が強かった。また、多くは女性だけを調査の対象とする「女性研究」であり、男性や男性組織との関係性の中で女性の講組織がどのように成立し、機能しているかなどの視点は希薄であった。

「女人講」も村落社会の中で社会的な役割を果たしている組織であり、講組織を含めたほかの社会組織との関係性の中で複合的、俯瞰的な視点から考察すべきものである。また、性別によって成立する組織という点では、性別によって生じる差異や非対称性を論じるジェンダーの視点が不可欠である。牡鹿半島の女性の講集団の1つである女講中をについて調査した戸邊優美は、同半島において、公的領域に位置付けられ、村落組織や行政区の自治にかかわる決定もする男性による契約講が主、私的領域を担い、ムラの自治には関与できない女講中は従という認識から、女講中に関する研究が進んでいなかったと指摘し、女性だけを対象とする女性研究から脱却し、複合領域としてのジェンダー論を目指す必要性を説いている(戸邊『女講中の民俗誌——牡鹿半島における女性同士のつながり』2019)。

一方で、講組織は自発的に結成され、緩やかなつながりによって成立している場合が多い。それゆえ、表向きには「主—従」あるいは「公—私」という関係性にありながら、実際には一般社会における「主—従」関係の中で起こりが

ちな、抑圧や搾取とは無縁の自律した組織である場合や、常に「公」のものが「私」に優越するばかりではないという複雑さもある。つまり、講組織には、一般の社会の中の権力構造とは異なる価値観や、権力構造を反転させるような機能も見られる。そのため、男性中心主義的で、家父長制的な一般社会あるいは宗教教団組織内では周縁化されがちな女性たちが、講組織においては主導的な立場に立って講員を率いたり、主体的に活動を行ったりすることが可能であることも少なくない。そうした講あるいは講的あつまりの特性を、ジェンダーの視点を通して把握することが本パネルの目的である。

本パネルでは、まず、戸邊優美が、牡鹿半島における女講中を事例に、経済的に自立し、主体的に活動する女性の講が展開した、男性の契約講やその他の社会組織との関係について考察する。次に、後藤晴子は、沖縄離島における宗教的職能の集まりを「講的なもの」として捉え、他の社会集団(門中組織や村落組織)との関わりから検討する。佐藤俊晃は、男性を中心とする教団組織とは一線を画し、独自の存在感を発揮する曹洞宗の詠讃歌講である梅花講について、実践者でもある立場から考察する。最後に、小林奈央子は、男性中心の上部教団組織に包括されながらも、各講の独自性が容認されてきた御嶽講において、女性先達が行と法力を頼みに主導的立場に立ってきた状況について分析する。

以上4つの研究発表に対し、2010年より「講研究会」の代表を務め、従前の講研究の再検討および新たな研究視座を追究し続ける長谷部八朗が、それぞれの事例を総括し、ジェンダーの視点を通じた「講と女性」をめぐる研究の意義や可能性についてコメントを行う。

本パネルによって、従来のような特定地域の事例研究、「女性研究」だけでは見えてこなかった、より普遍的な講あるいは講的組織の特質を明らかにする。

現代日本の葬送文化再考—異文化の視点から考える—

日英葬送比較文化の試み—直葬と火葬の歴史から—
日本の樹木葬—エコロジーの思想を取り入れた寺院—
骨仏から祈りの真珠まで—現代日本供養文化における遺灰の変形—

代表者：宮澤 安紀

宮澤 安紀 (筑波大)

セバスチャン・ペンメレン・ボレー (東北大)

ハンナ・グールド (メルボルン大)

コメンテータ：土居 浩 (ものづくり大)

司会：宮澤 安紀 (筑波大)

現代の日本では永続的な継承や先祖祭祀を前提としてきた従来の「家の墓」が都市化や個人化の波に直面して変容の圧力にさらされ、それに対応する形で1990年代頃より散骨、樹木葬、手元供養、直葬などの新たな葬送が広まりを見せてきた。こうした変容は霊魂観、死生観、宗教観の変化として、国内の研究者の間でも少なからず注目を集めてきたが、一方でこうした現代日本の葬送文化の変容は、人類学を中心とした海外の研究者によっても盛んに取り上げられるようになってきている。日本の社会を「エキゾチック」というよりはポスト工業化社会としてみなす彼らの視点は、個人主義の台頭、消費社会の進行、世俗化の進展など、グローバルに展開する事象という観点から日本の葬送文化を論じる道があることを示してくれる。しかしながら、同じ現象を対象としているにもかかわらず、これまで国内の研究と海外の研究結果が、特に西欧諸国との研究者の間で交わる機会は少なく、この領域における研究のより豊かな発展を目指した対話的な視座が望まれている。

上記の問題意識を踏まえ、本パネルでは、現在の日本で生じている葬送文化の変容を分析するための新たな可能性を、海外との比較の視点から、また異文化を背景にもつ研究者の最新の研究成果から探ることを試みる。

第一発表の宮澤報告では、2000年代より日本で急速に浸透している「直葬」について、同様に「direct cremation」という呼び方で直葬が広まっているイギリス社会との比較を念頭にこの現象の新たな考察の方法を提案する。直葬をはじめとした葬送の世俗化・簡素化の傾向は、東西を問わず近年の先進諸国で共通に見られるようになっており、日英の「直葬」も表面的には同じ現象のように見える。しかしながら近代に火葬が双方の国で導入された歴史的経緯をたどると、火葬そのものが持つ観念やイメージが両国では全く異なることがわかり、したがって現代における現象を共時的に探る際も、通時的な視点が必要であ

ることを指摘する。

第二発表のグールド報告では、火葬後の遺骨(遺灰)の取り扱いに関わる新たなテクノロジーの登場とその実践を、日本のデスケア産業におけるフィールド調査に基づいて考察する。遺骨には文化的・宗教的な象徴性が深く刻み込まれ、死者をケアする儀礼の中心となっているにもかかわらず、現代では伝統的な様式は断片化し遺骨の扱いは変化している。こうしたなか、先祖祭祀の負担を軽減するため作られた遺骨をめぐる新たな製品やサービスは、遺骨の物質的な形態に介入する形で成立している。本発表では、全骨を保存するのではなく、粉骨・分骨するような傾向の高まりにおいて、人々はどのように死者を捉え、霊をケアしているのか、また日本の新しい供養品が、どのように国際的なデスケア市場の製品に収斂し、あるいはそこから広がっていくのかを分析する。

第三発表のボレー報告では、どのように日本の寺院がエコロジーという現代的なコンセプトを採用し発展させているのかを、非継承墓の一つとして登場した樹木葬を対象に考察する。樹木葬は岩手県の寺院によって考案されたものだが、その考案者は墓石を樹木に置き換え、コンクリートの墓地を森林へと転換させた。樹木葬のコミュニティは生態系の再生、調査、教育を支援・指導し、日本の環境への新たな形での参与を促進している。このモデルが完全には採用されなかったとしても、現在では100を超える墓地で樹木葬が提供されている。この現象を理解するため、ボレーは樹木葬における死後観から、つまり従来の「社会的継続性」(祖先になる)という考えに代わり、樹木葬は「エコロジカルな継続性」(自然への回帰)という象徴を与えているとする分析を提示する。

以上の発表に対し、近現代日本の葬送墓制を専門とし、近年には韓国との比較研究にも取り組んでいる(『比較日本文化研究』19)土居が全体を俯瞰しコメントを行う。

2020年7月27日発行

編集・発行 日本宗教学会 第79回学術大会 実行委員会

〒154-8525 東京都世田谷区駒沢 1-23-1

駒澤大学総合教育研究部文化学部門内

HP : <http://jpars.org/conference/>